



宮城教育大学 大学院

- 音声認識アプリ(UDトーク)の実践報告 -

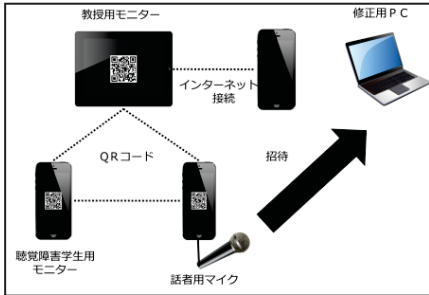
本大学院に在籍している聴覚しょうがい学生は、講義やゼミ等で教育機関プランで法人契約をしているUDトーク(Shamrock Records株式会社)を活用している。今回は、本学で行っている実践事例を報告する。

1. 事例紹介

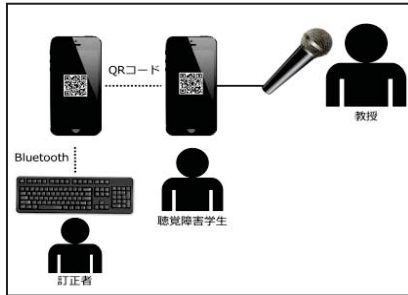
1) 講義の場面

少人数による講義と1対1の講義に分けて、音声認識アプリを活用している。どの講義においても修正者をつけている。修正方法は、PCによる修正とiPhoneにBluetooth接続したキーボードによる修正の二通りがある。

(1) 少人数による講義(5名前後)



(2) 1対1の講義



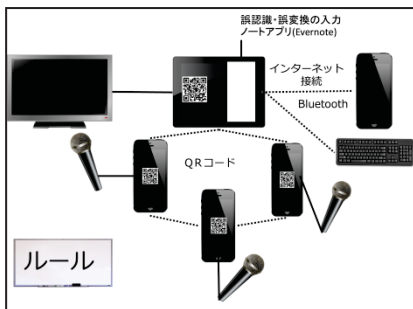
(3) 実際の様子 ※修正者あり



2) ゼミの場面

教員2名、学生5名で、学生が一人ずつ研究経過を発表した上で質疑応答や議論を行っている。全員が音声認識アプリを使用し、誤認識・誤変換の修正もしくは入力の話者以外の学生が担当するというルールで進めている。

(1) ゼミでの接続方法



(2) ルール

- ルール**
1. マイクと口元を近づけて話しましょう。
 2. 句読点を意識して切れ目良く文章で話しましょう。
 3. 話す時はボタンを押しましょう。
 4. 誤認識・誤変換の訂正方法
 - (1) 発表者の左隣の人が担当します。
 - (2) UDtalkの画面で訂正したいとき → iPhoneで訂正しましょう
 - (3) Evernoteの画面で訂正したいとき → iPadかキーボードで訂正しましょう
 5. 発言する権利を有するのは、マイクの所持者のみです。

(3) 実際の様子 ※修正者なし



2. 音声認識アプリを使用しての支援の良い点と課題点

	聴覚しょうがい学生	修正者	話者
良い点	情報量が多い		手話ができなくても、文字を起こしてくれる
	人の手で文字を起こすより速い	話者の認識率が高いと負担が少ない	話し方を意識できる
課題点	誤認識・誤変換が多いと、内容がわからない	専門用語の修正も含め全ての誤認識・誤変換の修正は難しい	自分の認識率が低い時、心理的ダメージを受ける
	UDトークの調子が悪い時の対応が難しい		

3. 話し手と受け手の在り方

<話し手>
自分の話を受け手に伝えるために、資源を最大限活用する意識をもつ

↓ 行動

例 ・話し方に気を付ける
・話す時は挙手する

<受け手>
話し手の話を理解するために、自ら環境を変革する意識をもつ

↓ 行動

例 ・ルールを作る
・参加者から意見等を聴く

<理想> 話し手と受け手が対等に話し合うことのできる環境を創る

問い合わせ：宮城教育大学しょうがい学生支援室 Tel : 022-214-3651 Mail:csd@adm.miyakyo-u.ac.jp
 大学院教育学研究科2年 三森伸一郎(発表代表者) Mail:i16079@students.miyakyo-u.ac.jp